

令和元年度第1回北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会 議事録

日 時 令和元年11月20日(水) 15:30~17:25

場 所 小樽市役所第1委員会室

出席者 (委員)

(会長) 小樽商科大学 李教授、(副会長) 小樽商工会議所 上参郷副会頭、
北海道中央バス(株) 五十嵐次長、(一社) 小樽物産協会 伊澤常務理事、
(社福) 赤井川村社会福祉協議会 上埜事務局長、
(一社) 積丹町観光協会 逢坂事務局長、
余市町文化財関係施設管理運営委員会 駒木根委員長、
(一社) 小樽市医師会 鈴木副会長、
ふるびら未来創造協議会 田岸副会長、小樽市病院局 並木局長、
新おたる農業協同組合 森組合長、(一社) 小樽観光協会 米花副会長、
(欠席) 公募委員 永坂委員、(社福) 小樽市社会福祉協議会 三船事務局長、
(一社) 余市医師会 林理事

(各町村)

積丹町 木田企画課主査、古平町 住吉総務課主査、仁木町 河井企画課主幹、
余市町 阿部企画政策課長、赤井川村 高松総務課長

(小樽市)

迫市長(冒頭のみ出席)、林企画政策室長、布主幹、栗山主査、小松主事

【委嘱状交付】

—市長より新任委員に交付—

【市長挨拶】(挨拶後退席)

(市長)

皆さん、こんにちは。市長の迫でございます。今日は、大変お忙しい中、令和元年度第1回北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会に御出席をいただきまして、お礼を申し上げますとともに、委員につきまして御快諾をいただきましたことにつきましても、心から感謝とお礼を申し上げたいと思っております。この北しりべし定住自立圏と申しますのは、平成21年に、この北しりべし定住自立圏の形成に向けまして、小樽市が中心市の宣言を行いまして、北後志の積丹町、古平町、仁木町、余市町、赤井川村の北後志5町村との連携をいたしたところございまして、平成22年の4月に、この定住自立圏の形成に関する協定を締結したところであります。この間、第2次の共生ビジョンを策定をいたしましたけれども、このたび、令和2年度から令和6年度までの5か年を期間とする計画を策定するという事で、皆さんには、委員の就任をお願いしたところでございます。これにつきましては、皆さん御存じ

のように、人口の減少が進んでいる、とりわけ、ちょっと資料を参考にさせていただきますと、北海道の人口は全国を上回るスピードで減少していくということでございますし、国立社会保障・人口問題研究所によりますと、2015年から2045年までの北海道全体の人口の減少率というのが25.6%、これに対して、私ども過疎地域では46.5%の減少になる。こういった大変深刻な状況にもなっているわけでございます。そうした中で、この定住自立圏構想そのものにつきましては、人口が減っていくという中で、それぞれの自治体が、フルセットのまちづくりをすることはもう難しいだろう、そういった中で、広域連携をすることによって、まちの存続、維持を図っていく、こういう目的で、この構想があるわけでございます。先日も、東京の方に、小樽港のポートセールスに行ってみましたが、その時にも、小樽だけでなく、各町村の観光協会の皆様とも一緒に出向きまして、小樽港に入ってくるクルーズ客船の乗船客を、管内に回遊させよう、こういったことで、町村の皆さんにも御協力をいただきました。また、実現はしませんでしたけれども、私が10月の下旬にロシアに経済使節団として、私を団長として行ってまいりましたが、その際にも、町村の皆さんに、何らかの形で経済交流のきっかけになればということでお声掛けをさせていただいたところでございますけれども、そういった形で、現在では、医療、それから福祉、交通など、連携をさせていただいておりますけれども、様々な分野で、これからはしっかりと、連携をさせていただきながら、これからのまちづくり、地域づくりを進めていきたいという中で、皆様方の御協力というのをいただきたいというふうに思っているところでございます。このあと、スケジュールなどの説明もあろうかと思っておりますけれども、皆様方からの貴重な御意見をいただきながら、この第3次の計画の策定に向けて取り組んでまいりたいと考えているところでございますので、お忙しい中、大変申し訳ございませんが、どうぞよろしくお願ひしたいというふうに思っております。以上でございます。

【委員紹介・事務局紹介】

－企画政策室長より紹介（資料1）－

【設置要綱の説明】

－布主幹が資料2により説明－

【会長・副会長の選任】

－委員からの意見がなく、事務局案（会長に李委員、副会長に上参郷委員）に決定－

【会長・副会長挨拶】

（会長）

小樽商科大学の李と申します。御指名ですので、会長を務めさせていただければと思います。本懇談会ですけれども、先ほど、市長からの挨拶にもありましたとおり、北後志地域の6市町

村、積丹町、古平町、余市町、仁木町、赤井川村、小樽市と、この地域の様々な課題、先ほど市長から話あったとおり、人口減とか様々な課題あると思うんですけども、そこを、6市町村がしっかり連携をしながら、この課題に取り組んでいくと、そのために、今日は、様々な分野の専門の方に委員になっていただいて、忌たんのない意見を通してですね、こういった課題を少しでも解決に向かうために、御議論していただくということになってると思います。そのために、会議進行等で、皆様に、少しでも、成果があるような形で進行させていただければというふうに思いますので、これからも、御協力のほど、よろしくお願いいたします。

(副会長)

副会長ということで仰せ付かりました商工会議所の上参郷でございます。副会長は会長を補佐するということでございますので、私が何ができるかどうかわかりませんが、皆さんの御協力をもちまして、会議をスムーズにできるよう努めてまいりますので、一つ、皆様、御協力の方よろしくお願いいたします。

【議事】

(会長)

それでは、早速ですけども、本日の議題を、次第に沿って進めさせていただければと思います。このあと、事務局からですね、定住自立圏構想についての概要説明と、北しりべし定住自立圏としての取組の経過及びその実績、さらには、その第3次ビジョンの策定に向けた状況等に関して、資料によって御説明をしていただくことになっております。で、その後ですね、委員の皆様から、特に皆様のそれぞれの関わっている専門領域、分野等を中心にですね、活発な御意見等をいただければと思っております。趣旨といたしましては、小樽市やそれぞれの町村に限定したものではなく、北後志という圏域が、今後どのような圏域を目指していくべきか、その中で各市町村がどんな連携をすべきか、その課題や方向性等を、様々な視点から御発言いただければというふうに思っております。それでは、次第にあります「5」の「議事」「(1)」の「定住自立圏共生ビジョンについて」の「①北しりべし定住自立圏について」及び「②主な取組と第3次ビジョンの策定について」、これを事務局から資料の御説明をお願いしたいと思います。では、よろしくお願いいたします。

① 北しりべし定住自立圏について

－布主幹が資料3により説明－

② 主な取組と第3次ビジョンの策定について

－布主幹が資料4により、栗山主査が資料5、6により説明－

【意見交換】

（会長）

はい、ありがとうございました。ちょっと長かったんですけども、今まで取り組んできた定住自立圏構想の趣旨、あとは、北しりべし定住自立圏としてのこの5年間の取組内容、統計数値等に基づいた圏域の状況について説明をいただきました。で、この後に、委員の皆様から、新たな共生ビジョン策定に向けての御意見等をいただきたいと思いますけれども、まず、今説明を受けた事務局の説明について、何か御質問等ございましたら、お願いしたいと思います。

よろしいですか。ちょっと、資料が多岐にわたっていますので、なかなか今すぐということでもないかと思っておりますので、後でまた何かございましたら、その都度、御発言いただければと思います。それでは、早速ですけども、意見交換の方に入りたいと思います。事務局からは、第3次共生ビジョンの原案作りに是非ともいかしたいということですので、委員の皆様からは、それぞれの御活躍の分野に関連して、貴重な御意見をいただければと思います。申し訳ありませんけれども、時間の都合もございますので、大体二、三分ぐらいでまとめてお願いしたいと思います。それでは、誠に勝手ですけども、上参郷副会長から御意見をお願いしたいと思います。よろしくをお願いします。

（副会長）

今回初めてビジョンの方に関わらせていただくものですから、なかなか全部を読み込めていないという部分もありますので、ちょっと、難しいんですが、商工会議所ということでございますので、産業振興の部分の取組がございまして、いわゆる産業の活性化ということであろうかと思っております。やはり、この地域ならではのですね、産業振興を活性化していかなければならないんですが、それには、人口が減少するというのが一番やはり大きな問題なのかなというふうには思っております、卵が先なのか鶏が先なのかという議論があるのかもしれませんが、産業が振興しなければ、そこに雇用が生まれなせんでしょうし、雇用が生まれなきゃ、そこに生活する方がいないということで、どこから手を付けていいのかが難しいところかというふうに思いますが、ただ、それぞれの地域で持っている産業を、ここにも書いているとおり、うまく組み合わせてということなんだと思いますので、それをこうなんとか拡充できればと思っているのではないのかなと思います。ちょっと、そういう意味で、何か、地域で、物を流通させたり、それから、地域での1次産業が6次産業までいくような、という形で進めていくことができれば、チャンスがあるのかなと思いますが、ただ、一つの答えがあるわけじゃありませんので、申し訳ないんですが、今の段階では、そういう形で、特に、このままでいくと、本当に産業が非常に厳しくなるのかなというふうには思います。何か全然答えにはなってませんけれども。

（会長）

恐らく、域内のいろいろな産業を、横串を通した形で、もっと連携を図るということで産業の活性化を図る。あるいは、今、おっしゃったとおり、特に、この地域って、1次産業って、けっこう、各市町村持ってますので、強みとして。なので、それを更なる6次化とか、もう少

し付加価値を上げていったらどうかという御発言だと思いますので、是非、参考にさせていただければと思いました。ありがとうございました。

続きまして、順にお願いしたいと思っておりますけれども、まず、五十嵐委員の方からお願いしたいと思っております。

(五十嵐委員)

それでは、私の方から、北後志地区の公共交通の現状という視点でお話させていただきたいと思っております。御出席の皆様におかれましては、当社を日頃御利用いただきまして、誠にありがとうございます。当地区の当社のバスというのはですね、沿線人口の減少以上に利用者減っているような状況で推移しております。資料の95、96ページに、地域公共交通の関係について資料が載っておりますが、載ってる路線、バス路線ですね、これは、補助を受けている路線ということになります。当社の路線だけではございませんが、こちらの補助を受けている路線については記載をされています。こういった補助を受けながら運行しておりますが、満額の補助ではない、あるいは、全く補助を受けていない路線も数多くございます。こういった中で、当社、相当努力してバス路線を維持しているという状況でございます。当社におきましても、収支の改善策としまして、今年の3月に、小樽の事業部、廃止するなど、路線の見直しだけではなく、こういった収支改善策も実施しているところでございます。こういった収支の問題もでございますけれども、一方では、乗務員不足ということも非常に大きな課題となっております。採用しても、採用した以上に乗務員が減っているような状況で、なかなか、補助を受けたとしても、走りたくても走る乗務員がいないといった深刻な状況となっております。何とか今、休日出勤等で、乗務員の休日出勤等でですね、路線回しているような状況ですけれども、それも今限界にきているような状況で、収支賅っている路線でも、今、どんどん減便をしながら、何とか乗務員を確保しているような状況となっております。今まで、採算合わないから、減便、廃止するといった流れとなってましたけれども、今、乗務員がいないので、補助金をもらっても、運行できないといった状況になってきております。今後、先ほどの意見の中にありましたが、新たな交通モードですね、コミュニティバスだとか、路線バスに頼らない形の公共交通も検討していくべきではないかというふうに考えております。

ただ、一方で、こちらの地区、非常に観光資源の豊富な地域でもございますので、当社でもですね、小樽市内は散策バスという観光バス、あと、積丹方面に関しましては、定期観光バス等をですね、夏で7コース、冬で今4コース、毎日のように運行しておりますので、こういった面からも、国内だけではなく、インバウンドも含めてですね、呼び込みできればというふうに考えております。今後も、いろいろな大きな課題抱えておりますけれども、皆様、また、行政の皆様とも、いろいろ連携取りながら、路線の維持、また、新たな交通体系についても考えていきたいというふうに思っております。利用促進についても、取り組んでまいりたいと思っておりますので、御協力をお願いしたいと思います。公共交通につきましては、以上となります。どうもありがとうございました。

(会長)

はい、ありがとうございます。続きまして、伊澤委員お願いします。

(伊澤委員)

はい。私どもがやっている部分の中では、販路拡大、商品開発、その他もろもろの部分の中でやっているんですが、もう皆さん御承知のとおり、非常に、この30年間、非常に厳しい低成長下、その他もろもろの中で、人口減少、いろいろ理由はあるんですけども、基本的には、この20年ぐらいの間で、卸・小売という部分のものが、この後志管内においても、もう40%以上、事業所、それから、従業員雇用、この辺の所がなくなっているという現実は、前回の、いろんな資料の中でもあるんです。で、それが全て、大規模化、大手に全部集約されているという部分の流れの中で、非常に苦しいと。一方では、先ほど上参郷さんがおっしゃったように、人口減少という状況の中で、本当は販路開拓したり、商品開発して、そういう分野の中でやっていきたくても、現状の事業を維持していくのも困難な状況に追い込まれつつある。これは、もう、卸・小売という部分の中では、完全に結果が出てしまった。それが、今、製造業の方にも出てきてる。これは、別に、生産体制じゃなくて、特に、全国ベースでこれが進んで、同じような取組というのは日本全国で行われてる。例えば、ブランド商品開発、ブランド化、これは、地域を挙げて、日本全国どこでもやっていることなんですけども、そん中でやっぱり、どのように、個々の力の中ではできないという中でですね、非常に、生産能力ですとか、価格競争、ナショナルブランドには絶対勝てないわけですよ。そうすると、ニッチ産業の中で、どれだけ特徴をいかして差別化できて、確かに6次産業化っていう部分がうたわれてはいるんですけど、じゃあ6次産業化ってどういう取組をしているんですかってなると、やっぱり現実問題としては、なかなかできてない、個々の取組でしかあり得ない。そうするとですね、そういう部分の所が、基本的な部分の課題として、人材育成であったり、それから、新たな取引先の部分を接点作りたくても、できない状況が、今なってきていると、じゃあそれどうやってやるの、前回の、私、この部分の中であつたんですが、現実問題として、各6市町村の、年間においてやると、コミュニケーションがうんぬんっていう話もあるんですけども、実際には何もやられてないんでしょっていうふうにさえ感じてしまうことが、これ、主観ですけども、やっぱり、そういう部分でも、スピードと、実際に活動実施部隊で、何をやるんですかっていうレベルのことでやっていかないと、なかなかやっぱり厳しいのかなと。これは、もう、産業以外含めて全ての分野でそれが言えることではないかなということを感じてましてですね。もう、あと、実行部隊として何をやるんですか。じゃあそろって、観光分野とか、医療分野だとか、そういう部分のものってのは、かなりやっぱり、交通含めて、現実的な問題としての取組っていうのは、進んでると思います。ただし、産業振興であるとか、観光分野であるとかっていう部分は、もっともっと、その辺の所を現実部隊として結果を出していくような形にしていかないと、非常に厳しいのかなと。人口減少うんぬんを止めるための定住圏うんぬんという部分を含めましてね、目的は何で、それをやるためには何をしなくちゃいけないか。ここ、数値いっぱい出てるんですけども、この数値でいいんだろうか、じゃあ、人口減少の

所が実際に何も載ってないですよ、結果として人口はこの5年間でどうなるんですか、これからの5年間でどうするんですか、ていうようなことを目標数値に、KGIなり、KPIなりっていう一つの目標設定の中で、動いてきているわけですから、その辺の所をやっぴり具体的なものとしてやるべきところにきてるんじゃないかなっていうふうに、個人的にはちょっと思ってたんで、そういうものを何とか実現していきたいなと思っております。

(会長)

はい、ありがとうございます。続きまして、上埜委員、お願いいたします。

(上埜委員)

はい。私、福祉の方なんですけど、どちらかというと、住民目線として、今、本当に、個々の自治体が、うちの村なんかも、一生懸命、いろんなことをやって売り込んでいるんですけど、今、日本全国で、1,700以上ある自治体が、全ての市町村みんな必死になって今売り込んでいる中で、そこで、なかなか、特質していくのは難しいかなと思うところで、やっぱりこういう定住自立圏で、北後志という所でやれるというのは、こういう、皆さんみたいな方々が集まって、いろんな分野で集まってできるというのは、すごく、素晴らしいことだとは思っているんですけど、実際に、伊澤委員とかも言われてたように、これを北しりべしの発信として動かす組織ってというのがどこにあるんだろうなっていうのが、ここでこう見てて思うんですよ。実際に各町村に戻っちゃうと、町村の職員さんは、やっぱり町村の仕事をしなきゃならないということで、この北しりべしビジョンの中の売り込みっていうのは、一体誰が、そこをやる組織ってというのがないのかなっていうのが、ちょっと思うんですよ。本当に、ここに住んで、いろいろと周りの町村のすごくいい所とかいっぱい見るんですけど、実際に仁木とか余市でワインツーリズムをやっても、実際にそのワイナリーに、どこのワイナリーがおいしくて、どこにどんなものが売ってるのか、そういうことを、実際に自分たちがどれだけ知っているんだろうとか、小樽とか、この間も、新日本海フェリーが小樽から積丹までの1日クルーズとかをやったりとかするんだけど、そういうのも、たまたま、知ったぐらいで、意外とみんな知らなかったりとか、そういったことが、やっぱり情報発信されていないんじゃないのかなあと思うところで、やっぱり、自分たちが後志に住んで、後志楽しいって、北後志楽しいって思っていないと、発信もできないのかなという、本当に小樽の友達とかがおいしい店とか教えてくれたりするんですけど、でも、ガイドブックとか、ネットでは、絶対にヒットしないと思うところで、本当に現実的に売り込みをする組織というものが、すごく必要なかなっていう、そこを、このビジョンの中でどこが担うのかなと思うところで、ちょっと疑問とかを思っています。

あと、福祉の方で、後見センターの事業に関して言いますと、やっぱり小樽に後見センターがあって、広域でやるのは非常に効率的にいいんですけど、やっぱり各市町村が自分たちの所もちゃんとやってるっていう認識を持たないと、小樽に任せればいいっていうような感じになっちゃって、やはり、周辺町村に住んでる人にとっては、住民にとって不利益になる部分があるんで、そこはやっぱり、各市町村が、ちゃんと責任持って補填していかなきゃならないの

かなということを感じています。すみません、まとまりなくて。

(会長)

はい、ありがとうございました。貴重な意見いただきまして。続きまして、逢坂委員お願いします。

(逢坂委員)

積丹町なんですけれども、私どもも、今までのお話とか、この資料も見させていただいたんですけど、結局のところ、皆さん悩んでいることは、みんな、全国同じなんだなって、高齢化と、高齢化によって人口がどんどん減ってってというのは、うちの町村も同じような現状で、観光業にすれば、高齢化によって担い手がいなくて、閉める所が大半です。やっぱり後継者がいないということで、民宿さん、旅館さん、商店さんも閉める所が多く、20年前に比べて半分以上の、うちの方は、観光協会の会員さんになっているというのが現状なところなんです。で、この高齢化や少子化をいかに止めるかっていうことで、この定住自立圏っていうあれがあるんですけども、はたして、この定住自立圏が絵に描いた餅になるのかなというのが、すごく読んで思いました。目標とか、目的が、すごいなって思ったんですけども、確かに、本当に、何をどうすればいいんだろうっていう所にやっぱり至りました。

あと、広域観光という点についてなんですけれども、北後志、小樽さんも含めてなんですけど、インバウンド関係では、北後志として連携をとってやっているのが現実なんです。小樽港に入ります大型クルーズ船が入港した際には、出れる町村、北後志の出れる町村は、必ず小樽港に行って、ゆるキャラでお迎えをするというのを今やっております。北後志だけでも各イベントに、積丹町も去年の7月にですね、ゆるキャラ、うにどんというのを作りまして、今まで北後志の中では、ゆるキャラがないのはうちだけだったんですけども、それですごく寂しい思いをしてたんですが、ゆるキャラを作って、一緒にですね、北後志の皆さんと一緒に、大型クルーズ船をお迎えしたり、また、古平、余市、赤井川さん、そして積丹も含めてなんですけれども、イベントの時期には必ず参加しようということで、観光協会、横に連携を取りまして、ちょっと大変なんですけれども、1か月に何回もイベントがあるものですから、ゆるキャラを出して、今のところ連携を取ってます。情報の共有という所におきましても、しりべしiネットを通してみんなで連携を取ろうということで、ホームページ、それからフェイスブック、そういう所なるべく発信をしていこうということで、今現在は、広域観光やっております。

ただですね、積丹も含め、赤井川さんもそうだと思うんですが、公共交通を乗り継いで観光するというのがすごく難しい状況です。それは、バスの本数が少ないですし、あと、JRも、余市、仁木さんはありますけど、積丹はJRありません。そういった関係で、バスでの乗り継ぎで観光をするというのがすごく難しい状況です。そんな中でですね、やはり、コミュニティバスというのが必要なのかなというのも、最近、すごく考えております。中央バスさんの方でもいろいろ努力していただいて、やっていただいているんですけども、積丹町も今年度バスが結構減になりました。それによって、観光している方が、神威岬まで行ったんですけども、3時間

ぐらい待たなきゃならないというのが現実なんですよね。そういう中で、やはり、お客様に不便を掛けなくて、広域観光していただくような道を作っていかななくてはならないなというのを、うちの方でも今現在、頭を悩ませているのが現実です。ちょっと取り止めないんですけど、以上です。

(会長)

はい、ありがとうございました。続きまして、駒木根委員お願いしたいと思います。

(駒木根委員)

教育ということなので、ここで学校教育のことをお話してもですね、ちょっと、直接携わっているわけでもないし、いろいろ問題が違ってくると思うので、ちょっと古い言い方ですけど、社会教育関係というような形で、意見を述べさせてもらいたいと思います。余市で、テレビの朝ドラでマッサンの放送がありましたよね、で、あれはですね、一時的なものでなくて、今でも続いているんです。で、それはね、ニッカさんが、あの放送が始まる数年前からですね、工場内の敷地にですね、博物館を造ったんですよ。前からあったんですけども、前はね、観光客あそこに降りて、ウイスキーただで飲めるなという、俺退職したら余市に住もうかなとかかっていうような冗談を言ってきたんですけども、ガラッと変わりました、非常に見やすくなって、それがあからずくと続いていると思うんです。それで、かなりの時間と費用を掛けてあそこをしたものですから、改革したものですから、今でももってるし、また、新しいドラマが作られたんですよ、それまでは、誰もマッサンなんて、余市の人は言いませんでした。マッサンと言われてたらしいというのは確かなんですけど、それほど親しみを持ってない、あの写真で見た人はけっこういるけど、あのおっかない顔を見ているだけで。また、たくさんの書物が出てました。だけれども、ニッカの方に依存してるものですから、どうしても不利なような状態を脱せる雰囲気ではなかったわけですよね。それも、何か、すっかりなくなって、ガラッと変えたことによって続いているなと思います。

余り話が長くなりますのでね。全体に、私、北後志の言いたいことはですね、何かまとまって勉強する、博物館でも何でもいいんですけど、連携したことは必要でないかなと思ってます。ていうのは、違うんですよ、その地域によって、割かし、北後志は北後志で近いんですけども、輝いていた時代がそれぞれ違うんですよ。よく見るとね。余市の輝いていた時代、積丹、古平が輝いていた時代と、それから、それ以後、明治になってから、小樽の場合と違うもんです。それで、でも、つながっているんです。で、この辺をですね、商大さんなんかでも、リーダーになっていきますと、一つの物語といいますか、いろんなもの残ってますので、勉強になるかと思います。最近ですね、よく少子化なんかでいわれますけれども、今が減ってるのはね、私痛感してるんですけども、郷土史家だとか、郷土に関心を持ってるのが非常に減ったんです。で、これは、学校の先生自身も、地域のことについて関心持たなくなりました。やってられないんです。忙しくて。で、これ、戦前はね、いいことか悪いことかは知りませんが、それはさて置いて、郷土史というのが、関心持ってる人が相当いたんです。で、これは、かなり、関心持ってる人は、ずうっと長く関心持つんです。関心持っていない人でも、歴史

っていうか、人文的なことに興味持たなかったら、今度、動植物だとか、人文的でない博物学なんかには詳しい人だとか、そういう人がいたんですけどね。最近、そういう人が減ってきました。で、これは、勉強しなきゃならないとか、何か違ってると思うんですけども、もう少し、地域に根差した関心を持つようなことでなければ、ますます地域の底力がなくなってくると思うんです。で、その底力の、さっき話したニッカの話、やっぱり、歴史の捕まえ方というのを新たにしないと、それでないとね、なんぼ朝ドラ取り上げられても、これはすぐ消えてくと思います。そこの所を何とかしたいと思う。していかなきゃならないなと思っています。それから、ちょっと離れてるんですけど、全然またこれ、関心が違うんですけども、石狩市は、小樽とちょっと似たような所があるんですけども、歴史は古いんですけども、北前船の方にひかれてって、何か、北陸地方と結べちゃって、小樽に関心ないというか、こっちの方とちょっと違ってらるんですよ。だから、本当は違わないんですよ。あんまり。同じ所なんです。石狩湾一つですからね。あっち側か、こっち側かだけの違いで。そこの所を、もう少し勉強していく、我々が勉強していくことによってですね、底力といいますか、発展していくんでないかな、そこの所が一番大切でないかなと私は思ってます。ちょっと、時間長く使った割には、繰り返しが多くて申し訳なかったと思うんですけど、以上です。

(会長)

いや、貴重な御意見ありがとうございました。続きまして、鈴木委員お願いします。

(鈴木委員)

案に、3つ医療に関しては、書いてありますけれども、まず、初期救急医療体制の維持確保ということですが、現在、初期救急医療に関しましては、余市地区は余市協会病院、小樽は小樽市医師会が委託を受けまして、小樽市夜間急病センターを行っております。それぞれ、2次救急として病院があります。小樽市からは、年間1億数千万円の補助を受けて、ようやくやっている状態ですが、現在、内科と外科と両方やっておりますけれども、外科もやっているところは、実は、北海道ではほとんどなくて、外科に関しては、今後、2次病院をお願いしたいというふうに考えてますし、また、けっこう、別の問題として、働き方改革が非常に問題になっておりまして、一般的な960時間という残業は、医師には不可能ですので、1,800時間以上の残業は認められているのですが、実際には、2,000時間、3,000時間という人がおまして、夜間急病センターに出向していただいている医師も、ほとんどが、札幌の大学病院の医師で、実際には、昼間働いて、夜働いて、翌日また働いているということで、働き方改革を厳密にされるとですね、たぶん夜間急病センターは成り立たなくなるというふうに。連続勤務時間というの制限が出てきていますので、そういう問題が、今後出ると思います。

小児科と周産期医療に関しましては、現在、小樽協会病院が、小児科及び周産期医療のセンターになっています。先ほどありましたように、一時期、小樽協会病院の産科が休止になって、小樽市内の開業医1個のみが分娩を取り扱っていましたが、最近、再開されて、最初は、多数いた看護師、助産師なども再教育が必要でしたので、正常分娩から初めて、現在、異常分

娩も含めて、複雑なものも扱えるように、今なってきたておりますので、こちらに関しては、徐々に問題なくなるとは思います、ただなんといっても分娩数が大幅に減っておりますので、小樽でも年間分娩数500というぐらいになっておりますので、そういう問題はあります。

あと、圏域内の公立病院に関しては、今日、並木局長がいらっしゃいますので、小樽市立病院はお任せいたしますけれども、現在、厚労省で、地域医療構想というのがありまして、先般の新聞で、ちょっと問題があるという指摘は受けてはいますけれども、公立、公的病院を中心に、無駄な医療がないかどうかとうことですが、実際には、北後志ではありませんけれども、すごく大事な離島の病院とかがやり玉に挙がったりして、ちょっと現実的ではないという指摘があるのですが、これに関しては、皆様、御存じかもしれませんが、小樽商科大学と小樽市が合同で研究した2040年問題というですね、小樽の人口が、北しりべし圏域が半減するという本が出されてますけれども、それに応じて、小樽市、北後志、特に小樽市の公立、公的病院4病院ですけれども、おそらく病床数を制限しないとしないということとか、4病院がそれぞれに頑張るとですね、共倒れになるという危険がありますので、それに関しては、地域医療構想会議というのがありまして、そちらで調整する予定です。

なお、今年のブラックアウトの時には、小樽市立病院が、もう本当に、完全に自家発電、5万リットルの重油を持っていましたので、完全に機能していただきました。で、その3週間前から実は、シュミレーションを行ってまして、その3回目の最終シュミレーションの時に、実際にブラックアウトが起きてしまったので、実は、比較的スムーズに、3回目にはもうすぐに、小樽市立病院の2階の講堂に集まって、できたという経緯がございます。以上です。

(会長)

はい、ありがとうございます。続きまして、田岸委員お願いします。

(田岸委員)

私が経験しました範囲内の産業振興分野に関して、お話をさせていただきます。古平町はですね、産業でいうと一番大きいのは、たらこの塩漬け、これが一番大きな収入を稼いでいた産業振興分野なんです、4年前にたらこメーカー10社以上で作る加工協同組合が破産しまして、半分以上会社がなくなってしまったと。この時は、就業人口の1割ぐらいが、1年にして職を失いまして、その後事業を再編して、持ち直して、たらこの火は消えてないということ、まだ頑張ってやっていますのですが、そういった中でですね、古平町ではですね、北海道と一緒に昨年は150周年迎えましたので、この記念事業としてですね、町長を座長にしてですね、新御当地グルメですとか、あとは、今まで他町村さんにはお酒、各町村で代表するような地酒とかいろいろあると思うのですが、古平町はずっとなかったものですから、昨年やっとなですね、古平産の酒米ですとか地酒、古平のお酒を作りまして、開発いたしまして、この地酒もですね、古平町、この後志で取れる海産物に合うような辛口のお酒を開発いたしまして、町内外の方々から好評を得ております。

また、我々ふるびら未来創造協議会では、今後も農水産物の御当地グルメのように地域の特色のある資源を圏域外に広めていけるように、皆さんと連携、皆様方の町、村、市と連携して

PRできることですか、販路開拓を図っていければいいなと考えています。

他にも2点ぐらいお話させていただきたいのですが、今まで当たり前前に地元で取れている魚介類、農産物の中で、思い付かなかったような、今まで当たり前前にあったようなものを、当たり前前のものと当たり前前のものを合体させて作るような新御当地グルメみたいなものも作って、この圏域内外にアピールできればなと思っています。

うちの町では、平成29年にホッケを使用した御当地グルメを開発しているんですが、その中でもホッケのルイベなんかは今でも町内外の方にも大変人気を博してしまっていて、稼ぎ頭になっているといってもいいメニューになっています。魚介類に関連していうと、積丹半島のウニですね。ウニなんかも夏場になると大勢の観光のお客様がうに井を求めていらっしゃいますので、北海道の中でも大変優位性のある食材がございますので、そういったものを今後また活用していければいいのかなと思います。以上です。

(会長)

はい、ありがとうございます。続きましては、並木局長お願いします。

(並木委員)

人口減少のことを拾うのは適切だと思いますけれども、人口が減らない一つの要素としては、働く場所があるかということと、医療がちゃんとなっているかということと、教育ですね、学校がきちっと教育できるかという、この三つのことが選ばれるようなんですね。ですから、その辺の所を我々認識しながらやっていかなければならないと思うんですけれども。特に、我々医療面に関しては、これから役割分担をしてですね、きちっとした体制で医療をやっていかなければならないということですね。

そういう意味では、皆さんいろんなことで各企画なんかをしていますけども、情報をみんなに早く公開して、それが共有されて、それがどう活用しているか、その結果をですね、我々は評価していかなければならないんじゃないかということですね。いろんなことを計画していてもそれが浸透していかなければ効果が出ませんので、いろんな企画で計画を立ててやりますが、これが、少しでもやってみて、反応をじかに見ながら次に立てていくという、そういう考えをやっていくべきでないかなというふうに思います。

この地域だけで広報活動をして駄目で、全国的に知れる、よくデパートとかで食事なんかの展示をしますとですね、それがすごく人気があると言ってますね、鹿児島島の百貨店でやったんですけどね、そういうところで小樽地区というのがどういうことをやっているかという、そういうふうなパフレットの的なものも展示して、正しく理解してもらうことが重要じゃないかと思えますし、そこにですね、5町村の方々も参加できるような形にして、みんなでやっていく形が望ましいじゃないかなと思っています。

それから、その一つとして我々のメディカルツーリズムのこともあるんですけども、これは、もう少し積極的で、ただ外国人だけでなく、日本人の高齢者の方が北海道、小樽を訪ねてきて、いろいろ検査をしながらこの周りを観光するという、そういうような所をもう少し積極的にやっていかなければならないんじゃないかなと。ちょうど、我々と小樽商大と観光で、検討

をしているのですけども、まだ、それが十分に発展していかないところがあります。それを、これからやっていかなければならないかなと思っています。そういう意味で、我々は、もうちょっと、せっかくここに小樽商大という大学がありますので、若い学生がたくさんいますし、留学生もたくさんいますので、そういう人たちと連携して行って、小樽をもっと宣伝していかなければならないんじゃないかというふうに思っています。それから、先ほど言われましたけども、段々、段々、やっぱり、医療の世界もですね、時代とともに変わっていきましてですね、今までどおりのやり方ではやっていけないということで、そのためには、自分たちの仕事をしっかり理解して、そして、それぞれ役割分担をしていく、無駄な所はなくす、効率的な仕事をしていかなければならないのではないかというふうに思っております。実は、今日も会議があって、昨日も東京で会議があって帰ってきたんですけど、全国的にそのことが悩みになっておりまして、そういうところを頭に置いて、我々として、医療として、貢献できることを是非やっていかなければならないと思います。

もう一つ、最後ですけれども、今、皆さん方いろいろなことを述べられて、悩みを言いましたけれども、我々はその現場を知らないんですよ、行っていないので、積丹のその場所も古平も。そこにやっぱり我々が行って見ないと、書いている内容が本当にどうだかということが分からないということがありますので、できるだけ、どんな形でも、現場で、我々もそういうことを見て、そして、こういう討論をすべきではないかなというふうに、そういうふうには思っています。地域の医師会で毎年交互に会議をやりながら、地域の事情なんかを話し合うということもやっておりますので、やはり現場を見た上での、こういう討論をしていくというのが重要になってくるんじゃないかなというふうに思っております。以上であります。

(会長)

はい、ありがとうございました。続きましては、森委員。

(森委員)

新小樽といいながら、本所は仁木なんですよ。平成10年に5農協が合併しまして、今は大体465戸ぐらいの農家戸数で、合併した時から大体4割の人が農家を辞めて、高齢とか、経営が悪くなったという部分はあるんですけど、その中でもやはり、仁木は人口が減るんですけど、そんなに急に減らないということは、ある程度新規就農者みたいな人が来るというのは、何かと云ったら、基本的には、ここの新規就農者で来るということは、その土地に農業で暮らしていけるというのが一番条件なんですよ。去年、うちの農協では補助金をもらいながら22億ぐらいのミニトマトの施設を作ったんですけど、やりだして、反当は大体、今年はちょっと悪いんですけど、去年で400万以上の利益が出て、半分経費として引いても反当200万ですよ。それが極端な話4反か5反作っているだけで、1千万くらい上がるのですから、そこから考えるとざっくり計算していくと、そんなに新規就農者でも大きなトラクター、農機具いらないし、面積は十勝みたいに何十ヘクタールというような面積もいらないという分では来やすい部分で、毎年、多分、来年は二人の人は間違いなく入ってくると思うんですけど、そういうことはやっていかなかったら、いろんな生産組織もそうだし、農協もそうだし、面積は合併から、

農家戸数は減っているけど、売上げは逆に右肩上がりなんですよね。トマト自体は合併した時は5億ちょっとしかないけど、去年は27億5千万ぐらいあったんですよ。他のものが減ったりいろいろあるんですけど、魅力的なものは何かっていうことを考えてやっぱり農家が来て、実際、農業委員会だとか、役場、農協に来るときには、大体土地もこういう所を見ているんだということであるんですよ。そういうものをいかに手助けしてやるかというのが、やっぱり役場であったり農協の仕組みなんで、もうちょっとその辺は、今、中期計画3年のを立ててるんで、それも具体的にはやっていかないと駄目なんで、役場とタイアップしてやってきて、新規就農者を入れながら、なるべく人を減らさないということがまずやっていきたいというのが一つですね、今日のこの冊子を見ても、先ほど言った中期は、うちは今3年作るんですけど、今までのうちの農協の中期計画というのはこれもやるあれもやるって20ぐらいのものをザッと並べていく、はっきりいって20のうち何ぼやったのよっていうことを言ったら、実際的には二つか三つだって、それだったら、本当にやる気の問題を、目標をここに掲げるんだったら、三つぐらいでいいと、そんなものたくさん掲げたってできねえんだから、三つぐらいを掲げて、その三つの目標に向かってやるために何をするかっていうことを考えてやらなければ駄目だべっていうことで、何でも書くのは、格好良く書くというのは何ぼでもできるんですよ。いろんな職場でも、こういうこともやります、おーいいことだねって言うんだけど、それを本当にやれるのっていうのは、多分作っている本人にできえ、ちょっと疑問にしている部分があるので、本当にやれることをきちっとある程度三つか四つって、各部門あるんですから、そこをきちっとやって、そのために、目標に向かって、何をするかっていうことを考えていかないと、多分、先ほど誰か言っていたけど、絵に描いた餅になってそれで終わっちゃう。でなくてやっぱり、そのための目標設定をして、行動に起こすための何をするかっていうことをやっていかないと、多分、いっぱい集まって、何かいろんな資料とか集まるけど、資料作りのための会議ではないので、そういうことはもうちょっと真剣にみんな考えないと。本当、3年、5年なんてあつという間に過ぎますから、やろうと思ったときには何もやっていないってことになるんで、やっぱり、やるからには行動も早くして、その代わりどうすんだっていうことを真剣に討論していかないと、多分、こういう問題というのは、各市町村も集まっていますんで、その辺はやっぱりお互いに協力しながらやっていくというのが、やっぱり大事なかなというふうには、ちょっと感じました。以上です。

(会長)

はい、ありがとうございました。最後になりますけど、米花委員。

(米花委員)

観光の面からなんですけど、移住とか、この北しりべしにも、前も参加させていただいているんですけど、人口減とか、いつでも同じ話題で、皆さん同じことを考えていらっしゃると思うんですけど、ノベタンで全員一気にいいことをやりましょう、人口減少なんで移住政策やりましょう、きっと日本全国どこでも同じことをやっていて、ちょっと切り口変えてやりませんかかって言うと、行政が絡むとできないということをやうと何十年も経験をさせてもらって

います。ただ、ある程度切羽詰まってやしないと、インバウンドに関しても、インバウンド受入れしましょうって言うけれど、受入れの態勢をしっかりと組んでいるとこっていうのは、一、二件とかそれぐらいしかなくて、インバウンドは来るけれど、来てもらったらしゃべれないから怖いからちょっと敬遠するみたいなね、それで売上げ上がらないんだって言ってて終わっていると。で、その解決策どうするんだっていったときに、これは入管とか、いろんなビザの関係があるので、地域が動いていかないと無理な場所があって、それを何個提案しても駄目だった。で、移住にしても、今、年間100万ぐらいの、きっと、国内移住の予算があって、それを何で海外の人の移住の予算とか研究とか勉強に使えないんだと、これは使えなかったんですけど、外国人に対してどう向き合うかっていうのを5年とか10年スパンで考えていかないと。ニセコが良い例なんですけど、10年間でインバウンドが来始めて移住者が増えると、地元の小学校に外国人の子どもが通いだしてきて、その外国語を学ばせたいという日本人の家族がわざわざ移住してその学校に入れる。インターナショナルスクールみたいな位置付けになってきて、その子たちは、きっと、あと10年すると、外国人というわけではない同級生だって、20年すると地域が全く変わっちゃうんですね。この話題って、きっと20年前にもあったんですよ。インバウンドが。その当時やっていると、今きっと、日本人と外国人の血を引いた違和感のない市民が小樽にいたり、北しりべしにいたら、どう変わっていたんだろうなというふうにはすごく思っています。で、今、ある程度の予算があるのであれば、この地域に住んでいる若い、若くなくてもいいんですけど、海外に対して目を向けたいという若者に対して基金を積んであげたいなど。基金で留学しておいで、又は企業がこういうことで勉強させたい人材を募集するとか、若者がこういうことで勉強したいんだけど、金を出してくれる企業ありませんかって。半年やら1年、行って帰ってくると、人脈も広がるし、言葉もしゃべれるし、そんなのが人口何万人とかというまちに5年間同じことをやって10人ずつで50人やったら、その裾野で友人がどれだけ広がって、新しい商売もできてると思うんですよ。きっと、そのぐらいのスパンで、今回も5年というスパンなので、そういうスパンでもって物事を見ていて組み立てていただきたいなというふうに非常に思います。

医療もバスもそうですけど、英語表記がなかったり、どうやって行ったらいいのかというのが、分からなくても対応し切れてない。バスの行き先も漢字だけで、色分けと番号というのもされてなくて、海外に行くと当たり前にあるんですけど、それすらもできていないというところだったり、ちょっとしたことでなんとでもなるところがたくさんあって、そのできること、総論じゃなくて、各論で1回何をやったらいいのかとか、各論なんだけど全ての分野に、若いやつを留学させて、いろんな分野でちょっとずつ変えていくだったり、いろんなことができると思うので、1回ちょっと真剣に危機感をもって、物事を前に進めるという前提で話し合っていければなというふうに思っています。以上です。

(会長)

はい、ありがとうございます。今、皆さんから辛口のコメントを含めて、実際に運用できそうなアイデアもあったかと思っておりますので、是非それを今後の第3次定住自立圏の提案書に

まとめてほしいなと思います。

最後に、私からもコメントをさせていただければと思いますけれども、先ほど米花委員からも指摘ありました、あるいは他の方からもありましたとおり、せっかく小樽商大がいるのにみたいな話が結構あるのですけれども、なかなか、どっぷり地域に根差していろんな活動ができていない部分もおっしゃるとおりかなと思います。それなりにはやってると思うんですけれども、もっと積極的にまちの一員として、あるいはこの地域のある意味、教育機関として、もっともどっぷり中に突っ込んで、いろんな活動ができないといけないなというふうには思いますので、今以上にその活動を増やしていかなくちゃいけないなと思って聞いておりました。例えば、さっきマッサンの話もあったんですけど、実は、マッサンが始まったときにも、我々その協議会に入って、特に、高野さんって、うちの学術研究員がいるんですけれども、彼がいろんなマッサンに関係するいろんな歴史を発見をして、例えばタ婦人が食べていた実際のアップルパイを再現して、小樽の店でそれを作ってもらったり、あるいは学生を使って、いろんなタ婦人の足跡を集めて、それを更に今にどういう解釈をしたらいいのかみたいなことで、観光とかにも関連して、してみたり、いろんな活動は実はしていたんですけれども、なかなか不十分であったということも否めないと思います。

あと、皆さんが、多分、口をそろえておっしゃった意見なんですけれども、ある意味、たくさんいいことを指摘するんだけれども、じゃあどっから始まるのよみたいな感じですね。じゃあ、実働部隊はどこなんですか、という話もあったと思うんですけれども、やっぱり、こういう会議をやる中で、全て、網羅して、さっきの修正文にもあったんですけれども、総花的に書いてしまっても、なかなか、じゃあどっから取り組んで、どこを優先的にこの地域のために貢献できるようにするのかというのが見えずらいのかなと思いますので、今回、せっかく3回目です時代も変わって令和になったので、今度の懇談会は是非とも実働できるような形のめり張りがある優先順位の付けた取組の内容にしていければなと思ってますので、そこら辺、是非皆さん2回目以降そういう意見をもっと積極的に出してほしいなと思います。

あと、せっかく医師会のお二人いらっしゃいますので、ここで話すのものあれなんですけれども、確かに、地域医療の病院同士の連携って大事なんですけれども、もっと大事なのは、恐らく、地域包括ケアじゃないんだけど、医療機関と福祉とか、あるいは介護とか、こういった所はやっぱり連携して、更なる情報共有とか、あるいは地域を挙げて、少ない人員で高齢化が進む中で、最期までみ取るような、あるいは健康とか予防とか、こういった所を更に強化できるような仕組みを、もっと連携して作ればなと思いましたので、そこら辺も是非、次回以降、話題にしていきたいなと思いました。

あとは、さっき田岸委員がおっしゃったとおり、今まで当たり前に見ていたものが、ちょっと角度を変えたら、全く違う観点で、新たなコンテンツとして輝く可能性もあるのかなと思いますので、それでなら、地域の宝物って、多分いっぱいあると思うんですけども、それがまだ使われてない現状があると思うんですね。なので、ちょっと違う視点で、それを見直して、やっぱりこれからいろんなコンテンツを更に再発掘をして、それを更に地域でうまく連携できる

ような仕組みをどんどん模索していきながら、全ての分野において活用できればなと思いました。

あとは、交通機関、中央バスさんお1人しか参加していないので大変恐縮なんですけども、様々なさっきの人員問題も含めて、かなりたくさん問題を抱える中でも、最善を尽くして、多分いろんな2次交通の機能が麻痺できないような仕組みを頑張って作られていると思うんですけども、それでもやっぱり他の町村から見ると、死活問題として、特にここで書かれています病院に通うためのバスとか、交通機関が、やっぱり足りないとか、そういう問題って現に多分起きていると思いますので、そこはもっと知恵を絞ってですね、どういう形がいいのかというのは私も分からないんですけども、そこをもっと議論していきながら、実際に、コミュニティバスを超えた新たな2次交通の在り方というのもやっぱり検討してほしいなというふうに思いました。

ちょっと長くなったんですけども、これでちょっと時間がそろそろ来そうなんですけども、何か他に、今まで発言いただいたんですけども、これをもう少し語らせてくれという方、おられますか。

(伊澤委員)

ちょっといいですか。さっき米花さんがおっしゃってたですね、いわゆる、私ども、販路の中で最近開拓してお付き合いさせてもらってる、熊本に道の駅があるんですよね、デコポンという、ブランド、玉ねぎだとか、お肉ですとか、あとフルーツですよね、あそこ取引始まってですね、そこコミュニケーション取ってましたらね、人口2万ちょっとかな、その所が、実は、カンボジアにもう既に七つの学校を造ったんですよ。びっくりしたんですよね。で、今年七つ目の学校を造るんですって。そこに必ず毎年、子どもたちを研修に行かせて、いろんな地域交流もやりながら、お互いに情報交換しながら、関係作りをしている。こんな所があるんだという。先ほど米花さんがおっしゃった部分の中で、一つずつそういう部分の在り方というのが、本当に物の流通だとか、人呼んできて観光うんぬんだけじゃなくなってきて、私いつも言うんですけども、百貨店がもう、十数年前ってのは、300あったんですけども、今、200ぐらいになっちゃってるんですよ。売上げも当然なって、これが、あと3年たつたかないかで150ぐらいに恐らく減ると思うんですよ。そうすると、従来の流通構造市場が、もう完全にアウトになって、これはもう大規模の、いわゆる寡占化されてる状況と、もう一つは、新しい、今、地場産品を、物産展中心に売れてるんだけども、主力の店舗がほとんどなくなってしまふということになると、今、卸・小売の部分じゃなくて製造業自体もどうしようもなくなっちゃう、それ、先ほど言ったように、日本全国同じようなパターンの中でしのぎを削るだけであって、そこに、従来と違うステージを作らないと、そういう部分の中でどこもやっていないことをやらない限り、この同じ流通形態の中では、勝ち残れないし、そこは、もう地域の根幹に関わる問題、で、小樽は、確かに、知名度がどこでもあるんですよ、人口11万ぐらいでも、非常に大きな知名度があって、誰もが知ってる、逆に申し訳ないんですけど、後志っていったら、何だろう、でも、ニセコは知ってる、で、古平、余市っていうのも、個々に知

ってる人は結構いるんですよ。フルーツの仁木、余市っていうことも含めて、だから、それをおっしゃってましたようにね、一つのやっぱり地域連携しながらね、どこもやってないことに挑戦していく部分のものを創り出していくっていうことをやらない限り、しかも、情報の拡散も、今、若い人がSNS中心に、ラインだ、それから、紙、ペーパーうんぬんではないような時代、一つのニュースが全国ネットでボーンといったら、北見の赤いサイロ、いまだに商品が供給が足りないっていうような状況がずっとあるわけですよ。だから、森さんなんかも、先ほどの、あーなるほどなと思ったんですよ。就農者が増えて、そういう傾向が出てきてるっていうことはね、やっぱり、従来と違う所をやらない限り、生きるすべがないんじゃないか、だから、僕は、そういう意味では、本当に、地域、この6市町村がね、連携して何かの新しい部分をつくって、そこでどこもやってないことをね、うちはしていくということを実行部隊を作りながらやらない限り、それは、観光も含めて全て、魅力度をもっとアピールできるチャンス、今、絶好の、後志の中には、ニセコっていうのは、日本全国どこに行っても注目されてるんですよ。すごい知名度と、新しい未来の日本の観光産業のいわゆる新しい形態をつくり出しているニセコ・倶知安、その近辺というのは、それぐらいのインパクト持ってるんですよ。それと一緒にしながら、連携する地域の6市町村がね、その辺の所を含めて、魅力度を出していったら、大分変わるんじゃないかと思って。だから、僕は、実行部隊、今どこもやってないことを今から、コミュニケーションうんぬんっていつてるレベルではもう遅いんですよ。それを何とか形にできるような方向性を。

(会長)

この資料見てたら、毎年同じ予算。せっかくね、これだけ御議論される中で、何かめり張りが付いてるとは思えないので、市でできないのであれば、民間で基金作りましょうという話もあったと思うんですけども、やっぱり、それぐらい、課題はいっぱいあるんですけど、どこから手を付けるんですかとか、優先順位どこからやりますかという話は、是非、この令和の新しい時代に向けて、実動部隊も含めて、伊澤さんが多分先頭に立つと思いますので、是非お願いしたいと思います。

あと、余談ですが、さっき、後志のブランド、地域ブランドっていうのがあったんですけど、実は、数年前にですね、台湾の物産協会も含めて、応援しましょうというところで、向こうのデパート行って、実演しながら、後志のいろんな食べ物作って、披露した経緯があるんですけど、後志って英語で書くと、皆さん読めますかっていう話がまずあって、皆さん読めないんですよ。皆さん多分、後志って日本語で漢字で書くと、あと、平仮名で表記するのと、多分、印象かなり違うと思いますけれども、英語で書くとまた違ったインパクトがあってですね、まず皆さん全く読めなかったんで、どこなんですかということから始まって、小樽は知ってる、ニセコは知ってるみたいな話なんですけれども、後志は全く英語では浸透できなかったというのがあって、やっぱりかなりハードル高いですので、むしろ、積丹とか、仁木とか、余市とか、赤井川の個々のブランドを中心に、それぞれの特色あるものを連携しながら、一緒に手を組んで地域を盛り上げていくというのがスタンスとしては正しいのかなと思います。

ちょっと、時間がかかなりオーバーしてますので、これで、皆さんからの貴重な意見をですね、事務局に改めて整理していただいて、第3次共生ビジョンの原案の時に参考にしていただければと思います。また、先ほど、事務局から今後の進め方について説明があったんですけども、皆様から御質問、御意見等ございますか。今回は、12月に予定してるんですけども、せっかくですので、今日出た皆さんからの御意見をちょっと是非酌んでいただいて、次回の新たな議論をスタートできればなと思いました。事務局から、後日、開催日の日程を皆さんに調整をすると思いますので、それもよろしくお願ひしたいと思います。そのほか、皆様から、事務局から、何か。

(並木委員)

この北しりべしの会議の活動の窓口は、この事務局がもっともっと活発にやってもらうという形でいいですか。

(会長)

そうですね。

(並木委員)

いろんな宣伝の仕方とか、アピールの仕方がですね。プロ…。

(会長)

おっしゃるとおりです。皆さんおっしゃったとおり、今の時代に、皆さんSNSでシェアして、インスタに載せたら、みんなそれが分かるような時代ですので、そこら辺のプロモーションの仕方も、ちょっと工夫してほしいなと思います。事務局から何か説明がございますか。

(布主幹)

謝礼関係の書類をお持ちの方、最後に渡していただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。以上です。

(会長)

それでは、以上をもちまして、第1回の懇談会を終了いたします。本日は、長い時間、どうもありがとうございました。